

ISSN 1882-0468

ISSN-L 1882-0468

NDL 書誌情報ニュースレター

2010年3号(通号14号)

目次

世界図書館情報会議—第76回IFLA大会(スウェーデン・ヨーテボリ)に参加して (収集・書誌調整課 東弘子)	1
これからの情報組織化のあり方とは?—TP&Dフォーラム2010参加報告 (収集・書誌調整課 佐藤良)	4
もっとアジアからの声を—ISO/TC46会議 濟州島大会報告 (収集・書誌調整課 河合将彦)	8
公開講演会「セマンティック・ウェブと図書館:機械が情報を読む時代へ」開催報告 (収集・書誌調整課)	10
お知らせ:「公共的書誌情報基盤」の第一段階として、「NDL新着図書情報」を公開しました (収集書誌部)	11
コラム:書誌データ探検隊 これまた一筋縄ではいかない、「団体名の変化」を追いかけよう! (NDL書誌情報ニュースレター標目探偵団)	12
掲載情報紹介	17
編集者からの一言	18

世界図書館情報会議

第76回 IFLA 大会（スウェーデン・ヨーテボリ）に参加して

「世界図書館情報会議（WLIC）－第76回国際図書館連盟（IFLA）大会」が2010年8月10日から15日にかけて、スウェーデン第二の都市ヨーテボリで開催されました。国立国会図書館の代表団（長尾館長以下6名）の一人として、目録・書誌系のセッションを中心に参加しましたので報告します。[1] [2]



会場となったスウェーデンエキシビション& kongressセンター

今回の大会のテーマは「知識へのオープンアクセス：持続的な発展の促進に向けて」でした。テーマを反映し、私の参加したセッションでも、書誌データをオープンアクセスなものとし、いかにインターネット上にて使いやすい形で提供するか、といったことが盛んに取り上げられていました。

書誌分科会のセッションの主なテーマとなっていたのは全国書誌の提供についてです。全国書誌はその収録範囲、提供方法共に変化の只中にあり、昨年「電子時代の全国書誌」という指針が刊行されたばかりです。[3]

国立国会図書館が作成・提供している日本全国書誌の収録範囲は、主としてパッケージ媒体の電子資料も含む国内単行資料、逐次刊行物資料ですが、各国ではその収録範囲をオンライン系の電子出版物に広げつつあります。セッションではセルビア、ドイツ、ポーランドの取組について紹介がありましたが、今回特に興味をひいたのがドイツ国立図書館の新しい全国書誌サービスでした。

ドイツ国立図書館の全国書誌の収録対象は、紙資料やパッケージ資料だけでなくオンライン出版

物も含み、さらに特徴的なのはドイツ語以外で書かれ海外で出版されたドイツに関する著作：ジャーマニカ (Germanica) を含む点です。ただし、資料種別や流通形態等により 7 つの部に分かれています。

しかし、今年からオンラインジャーナルとしての提供を開始し、分断されていた全国書誌を横断的に、様々なアクセスキーから検索して対象範囲を絞り込むことが可能となっています。今後は RSS 配信機能の実装等さらなる機能拡張を目指しているとのことでした。

この他 PDF ファイルによる提供も用意されています。PDF ファイルは従来どおり部ごとの刊行ですが、オンライン刊行物の部の PDF ファイルは優れもので、OPAC 書誌へのリンクの他に、内容細目、目次情報へのリンク等も含まれており、PDF ファイルによるというやや時代に取り残された感のある提供形態からは想像できない多様なサービスを用意しています。



ヨーテボリ市立図書館

今回は、目録分科会、分類・索引分科会、IT 分科会、知識マネジメント分科会による 4 時間に及ぶジョイントセッションも開催されました。

ティム・バーナーズ＝リー (Tim Berners-Lee) の "Anyone can say anything about anything." という有名なキャッチフレーズを盛り込んだセマンティック・ウェブの概念の説明、IFLA の ifla.standards.info のもとの名前空間の設定の取組等セッションで取り扱われる事項は多彩で今回参加しているのが、本当に IFLA の年次大会なのか、ダブリン・コア・メタデータ・イニシアティブの年次大会に来ていたのだったか? と錯覚するような一瞬もありました。

国立国会図書館でも Web NDLSH の提供等、セマンティック・ウェブ対応の取組に着手し始めているところです。その中で今回の、知識へのオープンアクセスというテーマはピッタリとはまるものであり、各国の先進的な取組を目の当たりにし、国立国会図書館でも知識のソースとしてより発展的なサービスを提供していく必要があると改めて感じました。

誰もが情報提供者となり得る現在、様々な情報資源があふれ、図書館の存在意義が問われています。その中で今回のプレゼンテーションに印象的な一説がありました。それを引用して今回の IFLA 年次大会の参加報告を締めくくります。

- ・リンク・データは図書館にとってかなりの潜在的可能性を持っている。
- ・リンク・データのもたらす利益は、参加機関の数の増加と共に増す。
- ・図書館のデータはセマンティック・ウェブの世界において情報の確かさの支柱となり得る。
- ・リンク・データを実現することはささいなことではない。

東 弘子

(あずま ひろこ 収集書誌部収集・書誌調整課)

[1] 大会のプログラム、発表ペーパーの一部は以下に掲載されています。

<http://www.ifla.org/en/conferences-sessions/216> (参照 2010-9-30)

[2] 第 76 回 IFLA 大会の概要についてはカレントアウェアネス-E でも紹介しています。

東弘子.世界図書館情報会議 (WLIC) :第 76 回 IFLA 年次大会<報告>.

カレントアウェアネス-E1093. 2010, No.178.

<http://current.ndl.go.jp/e1093> (参照 2010-9-30)

[3] 「電子時代の全国書誌」については、その草案について本誌 2008 年 3 号 (通号 6 号) にて紹介しています。

http://dl.ndl.go.jp/view/download/digidepo_3507132_po_2008_3.pdf?contentNo=1

これからの情報組織化のあり方とは？—TP&D フォーラム 2010 参加報告

2010年8月20～21日、京都で「[TP&D フォーラム \(Technical Processing & Documentation Forum\) 2010](#)」が開催されました。本フォーラムは、全国各地の整理技術・情報管理等に問題意識を持つ研究者・実務者が集い、研究発表および討論を行うとともに、交流を深めることを目的として毎年夏に開催されるフォーラムで、今回で20回目を迎えます。今年は計36名の参加があり、その一人として本フォーラムに参加したので報告します。

今回のフォーラムでは、三本の研究発表がありました。

【1】「情報検索におけるシソーラスを利用した多義性の解消」

崔錫斗 (韓国・漢城大学)、金貳謙 (韓国・光州大学)、韓相吉 (韓国・大林大学)、金文昊 (韓国・Argonet)

まずは、崔氏から、韓国語の用語の多義性を解消するために作成しているシソーラスについて発表がありました。韓国では、1949年から公文書における漢字の使用をやめ、ハングルでの表記に一本化したこともあり、同形異義語 (多義語) が多く存在します。たとえば、「조사」という言葉には、「調査」、「釣師」、「曹司」、「助詞」など、約30もの意味があり、これに加えて、用語の標準化があまり進んでいない、分野別に原語・訳語・略語等の使用について共通基準がない等の問題もあるといます。

こうした多義性の問題を解決すべく、崔氏らが取り組んでいるのが、韓国語の大規模シソーラスの構築です。このシソーラスは、あらゆる分野の名詞を中心とする用語に対してメタデータを作成し、用語自体の説明のほか、各用語間の関係性を、BT (Broader Terms) や NT (Narrower Terms) などの階層関係や、ファセット指示子[1]を用いた対応関係・複合関係等により記述したもので、現時点で約80万語の収録数があります。

情報探索システムにこのシソーラスを用いることで、検索語が多義性を持つ用語であった場合に、ヒットした情報資源に使用される用語がどの意味であるかを特定し、利用者が期待する情報資源に効率的にナビゲートできるようになります。実際、このシソーラスを検索システムに組み込み、大学図書館の書誌データに対して検索を行ったところ、約50パーセント程度の多義性を解消することができたそうです。シソーラスの使用法としては、情報資源の主題分析を行い、シソーラスの語彙を索引として付与するというのがまずは考えられますが、それとは別の方向性として、情報探索時に用語の多義性を吸収するためのツールとして活用する方法もあることを示唆してくれる研究発表でした。

【2】「著者名典拠作成の自動化を目指して」

上田洋 (ATR-Promotions)、村上晴美 (大阪市立大学)、辰巳昭治 (大阪市立大学)

続く発表は、上田氏による「著者名典拠作成の自動化を目指して」でした。本発表では、同姓同名の自動識別に使用されるテキストマイニング[2]を支える基本的な技術について解説があり、その後ウェブ上の情報を対象とした人物の自動識別に関する研究について紹介がありました。

上田氏によると、ウェブ上の情報を対象とする研究には、「Web ページを出現する人物毎に分離する研究」、「各人物を識別するための人物に関連する情報を Web ページ上から抽出する研究」の二つに分けられます。後者の研究の一つが、上田氏自身による研究「Web 上の同姓同名人物識別のための職業関連情報の抽出」[3]です。当研究では、人物の職業に関連する情報に着目し、ヒューリスティック[4]を用いてそうした言葉を抽出して、クラスタを作成し[5]、出現頻度と Web 検索エンジンを用いた関連度計算を行った上で、最終的な職業関連語の候補を得て、人物の自動識別を行ったということです。

続いて、[SPYSEE](#)、[CiNii](#) といった機械処理により、人物の自動識別を行うサービスの紹介がありました。CiNii は、2010年4月1日から「CiNii 著者検索 (ベータ)」を公開し、CiNii データベース中の全論文の全著者に対して機械処理により ID を発行し、ID ごとに論文リストを表示する機能を提供しています。現時点では、機械処理によって 100%の精度で著者を同定し、ID を振ることは不可能であるため、CiNii ではユーザからのフィードバックを求めています。ユーザが指摘をしやすいように、著者同定が過統合であるよりは未統合であるように、アルゴリズムの適合率のチューニングを行うなど、フィードバックをあらかじめ織り込んだシステムの設計にしてあるといます。

こうした CiNii での実践を踏まえて、図書館で維持管理している著者名典拠に関しても、作成のプロセスの中に機械処理を組み込み、得られた結果の確認を図書館員や著者自身が行うようにすれば、精度を落とすことなく、従来よりもコストの少ない運用ができるのではないかと提言がありました。

当館では、現状として、マンパワーの制約もあり、すべての資料群に対しての典拠コントロールを行っていませんが、機械処理による半自動化をうまく業務に組み込むことによって、今後コントロールの範囲を広げられる可能性が出てくるかもしれないと感じました。

【3】「FRBR からみた日本の図書館目録：「著作」を中心に」

橋詰秋子 (国立国会図書館)

二日目には、当館職員の橋詰から「FRBR からみた日本の図書館目録：「著作」を中心に」について発表がありました。

まずは、「書誌レコードの機能要件 (Functional Requirements for Bibliographic Records: FRBR)」[6]の概要についての説明の後、自身の研究 2 本「FRBR からみた日本の図書館目録における「著作」の傾向：慶應義塾大学 OPAC を例として」[7]、「FRBR からみた Japan/MARC の特徴：著作を中心に」[8]について解説がありました。

一つ目の研究は、慶應義塾大学図書館の [KOSMOS II](#) の書誌レコードから無作為に抽出した計 1000 件 (NDC の類ごとに 100 件ずつ) に対して、FRBR を適用し、日本の大学図書館目録の FRBR 化について考察したものです。FRBR を適用した結果、「複数の体現形を持つ著作は全体の約 2 割を占めている」こと、ただし、「複数の体現形があることは、潜在的な利用度が高いことを示唆しており、この 2 割の著作が目録の中でもよく使われるコアな部分であると考えられる」こと、「複数の表現形から構成される「複雑著作」は類別に見れば 4 類 (自然科学)、7 類 (芸術)、9 類 (文学) に多く含まれていた」こと等の結果が得られたといえます。

続く二つ目の研究は、欧米ですでに実践されている MARC レコードを用いた機械的な FRBR 化が JAPAN/MARC (J/M)でも可能であるかを探るために、J/M のフォーマットを分析したものです。それによると、J/M には基本記入のフィールドがないため、著作の著者を特定することができず、タイトル標目も適用が任意であるため、日本の目録の FRBR 化を欧米と同じ精度で実現するのは難しい。日本の目録は、基本記入を捨て、ある意味で「ガラパゴス化」しており、FRBR 化を自動化するにも非常に労力がかかる。日本の目録は今後どのような道を進むべきか、独自の道があるのか、という疑問の提示をもって発表が締めくくられました。

今回のフォーラムでは、今後の図書館目録、情報組織化がどうあるべきかを巡って、「多義性の解消という点でのシソーラスの応用」、「著者名典拠作成の自動化」、「日本の図書館目録への FRBR の適用」という三つの観点からの研究発表と、闊達な意見交換があり、大変有意義なフォーラムでした。フォーラム中に参加者からも発言のあった「知的成果物をすべて記録する」という情報組織化の究極的な目標に対して、知的成果物の媒体が図書からインターネット資料へと拡大した現在に、どのようなアプローチをすべきであり、またどのようなアプローチが可能であるのか、今回のフォーラムで得た知見をもとに、考えていく必要があることを感じました。

発表資料は、2011 年春に論集としてまとめられます。来年のフォーラムは、東京を会場として開催される予定です。

佐藤 良

(さとう りょう 収集書誌部収集・書誌調整課)

[1] ファセット合成された分類記号の、各要素を分離する符号で、続く記号のファセットの意味を指示する。(日本図書館情報学会用語辞典編集委員会編. 図書館情報学用語辞典. 第 3 版, 丸善, 2007, 211p.)

[2] 大量の文章を自然言語解析の手法を使って単語やフレーズに分割し、それらの出現頻度や相関関係を分析して有用な情報を抽出する手法やシステムのこと。

[3] 上田洋, 村上晴美, 辰巳昭治: Web 上の同姓同名人物識別のための職業関連情報の抽出, システム制御
情報学会論文誌, Vol.22, No.6, pp.229-240, 2009.
<http://murakami.media.osaka-cu.ac.jp/papers/ISCIE09.pdf>, (参照 2010-8-27)

この他、以下二つの論文についても紹介があった。

・白砂健一, 小山聡, 田島敬史, 田中克己: Web の構造情報とプロフィール抽出を用いたオブジェクト識別, 第17回データ工学ワークショップ論文集(DEWS2006), 2C-i7, 2006.

<http://www.ieice.org/~de/DEWS/DEWS2006/doc/2C-i7.pdf>, (参照 2010-8-27)

・上田洋, 村上晴美, 辰巳昭治: Web 上の人物理解のための履歴書作成, 人工知能学会論文誌, Vol.25, No.1, pp.144-156, 2010.

<http://murakami.media.osaka-cu.ac.jp/papers/JSAI10.pdf>, (参照 2010-8-27)

[4]過去の事例の蓄積などから未知のものに対して予測を行い、ある程度以上の精度で正解に近い結果を得る方法のこと。アルゴリズムによる処理を行うと計算時間が爆発的に増加してしまうような場合に、よく用いられる。

[5] いわゆる「クラスタリング」のこと。複数のデータを、その類似度に基づいて分類すること、またそのための統計学的手法のことを言う。

[6] IFLA. 『書誌レコードの機能要件 : IFLA 書誌レコード機能要件研究グループ最終報告』. 日本図書館協会, 2004.

<http://www.jla.or.jp/mokuroku/link.html>, (参照 2010-8-27)

[7] 橋詰秋子「FRBR からみた日本の図書館目録における「著作」の傾向:慶應義塾大学 OPAC を例として」『Library and information science』No.58, 2007, p.33-48.

[8] 橋詰秋子「FRBR からみた Japan/MARC の特徴:「著作」を中心に」『日本図書館情報学会誌』Vol.55, No.4, 2009, p.214-228.

もっとアジアからの声をーISO/TC46 会議 濟州島大会報告

2010年5月11日から14日まで、韓国の濟州島で開かれたISO/TC46(情報とドキュメンテーション専門委員会)の大会に参加しました(ISOやTC46については、[本誌2009年第3号\(通号10号\)](#)をご覧ください)。



ISO/TC 会議 濟州島大会 会場風景

本年は、TC46の総会、およびその分科会(SC)である「技術的な相互運用性(SC4)」「識別と記述(SC9)」「文書・記録管理(SC11)」それぞれの総会やワーキンググループ(WG)等が開催され、日本から3名、全体では100名ほどの参加がありました。

近年SC9の中心となっているテーマは「情報の連携」です。昨年に引き続き、ISNI(International Standard Name Identifier: 創作者等の名称に関する識別子)の策定を担当しているWGの会議が開催され、規格案への投票の際に各国から寄せられたコメントを元に、たとえば「ISNIという文字と数字の間は、スペースかコロンか」といった、規格案の細かい文言や定義などについて改訂作業が行われました。策定された規格は世界中で使われるということで、誤読されない文言を選んでいくなど、規格が作られていく実際の現場を見ることができました。

同じく2009年に続いて開催されたIIG(Identifier Interoperability Group: 識別子間の相互運用性検討グループ)の会議では、各識別子間の相互リンクを想定してそれぞれのデータベースに含まれる要素(著作者・演奏者・出版者等)について話し合われました。それぞれの識別子は、規格の

中でメタデータの項目について定められていますが、識別子ごとに共通の項目が少ないため、そのままでは正確なリンクに使えません。これを整備できないかといったことについて、可能性が検討されました。また、情報の連携を検討する上で参考になる試みとしてVMF (Vocabulary Mapping Framework) [1] の紹介がありました。

筆者はTC46 総会およびSC9の各会議に参加しましたが、今回印象付けられたのは、アジアからの参加者の存在感でした。これまで、TC46は欧米が中心であり、アジアの存在意義はそれほど高いものとは言えませんでした。今大会では、主催者の韓国はもちろん、中国から新規格の提案があったりと、会議でアジア各国の参加者が発言する姿が目立ちました。TC46で扱う規格は、乗り遅れると、将来的に国際的な情報のやり取りに不都合が生じる可能性があります。日本も会議に積極的に参加しなくてはならないと感じました。

次回は2011年5月にオーストラリアのシドニーで開催される予定です。

河合将彦

(かわい まさひこ 収集書誌部収集・書誌調整課)

[1] VMFのアルファ版のリリースについては、カレントアウェアネス-Eでも紹介しています。メタデータ語彙のオントロジー、VMFのアルファ版がリリース
カレントアウェアネス-E1011.2010, No.164.
<http://current.ndl.go.jp/e1011> (参照 2010-9-30)

公開講演会「セマンティック・ウェブと図書館：機械が情報を読む時代へ」

開催報告

国立国会図書館は、2010年7月27日に公開講演会「セマンティック・ウェブと図書館：機械が情報を読む時代へ」を開催しました。

近年、図書館をはじめとする情報流通の世界では、ウェブサイトなどの情報資源にコンピュータが自動処理を行える形のメタデータを付与することで、より高度な情報探索を行えるようになる「セマンティック・ウェブ」が注目を集めています。このセマンティック・ウェブについて、概念や活用例などを紹介するという趣旨のもとに、本講演会を開催いたしました。聴講者は、図書館関係者のみならず、情報システムや出版関係者、教職員など東京本館および関西館をあわせ260名を超えました。

最初に、永森光晴氏（筑波大学大学院図書館情報メディア研究科講師）から、「知のリンク：セマンティック・ウェブとは何か」と題し、セマンティック・ウェブの意義、歴史、構造、活用例など、概要について発表がありました。

続いて、大向一輝氏（国立情報学研究所准教授）から、「セマンティック・ウェブと学術情報サービス」と題し、論文検索・提供サービス CiNii における著者 ID の導入やデータの構造化など、国立情報学研究所の取組を実例に、セマンティック・ウェブの活用について発表がありました。

最後に、大柴忠彦（国立国会図書館収集書誌部収集・書誌調整課課長補佐）が、「国立国会図書館 書誌サービスの新展開：Web NDLSH と DC-NDL」と題し、DC-NDL（国立国会図書館ダブリンコアメタデータ記述）の改訂や国立国会図書館件名標目表のウェブ版である Web NDLSH の公開など、当館のセマンティック・ウェブに対応したサービスへの取組と今後の課題について報告しました。

質疑応答では、「セマンティック・ウェブが一般社会でより広く活用されるためにはどのような活動が求められるか」「人がメタデータを付与するのではなく、機械が情報を自動的に処理するような将来像はないのか」といった質問が寄せられました。

講演会の詳しい内容については、以下をご覧ください。

[記録](#)

[配布資料](#)

(収集・書誌調整課)

お知らせ：「公共的書誌情報基盤」の第一段階として、 「NDL 新着図書情報」を公開しました

[「公共的書誌情報基盤」](#)の第一段階として、2010年10月27日（文字・活字文化の日）から当館サイトの国立国会図書館サーチ（開発版）のページで、[「NDL 新着図書情報」](#)を公開しました。

「NDL 新着図書情報」には、国立国会図書館に納入された国内刊行図書の基本書誌情報（13項目）のテキストファイル（タブ区切り）を毎日掲載します。ダウンロード可能で、“MS-Excel”などのソフトウェアにより展開できますので、ご利用ください。

(収集書誌部)

コラム：書誌データ探検隊

これまた一筋縄ではいかない、“団体名の変化”を追いかけよう！

[前回 2010年2号\(通号13号\)](#)では、団体名著者標目の選び方についてご説明しました。今回は、「団体名の変更」が発生したらどのようにするかについてお話しします。

個人名の著者標目においては、「改名」や「改姓」があった場合、「をも見よ」参照(下記例の「→:」は「～をも見よ」という意味です)します。たとえば、5年ほど前に歌舞伎俳優の中村勘九郎さんが中村勘三郎を襲名しましたが、このように表します。

○中村, 勘九郎 (5世 1955-)
→: 中村, 勘三郎 (18世 1955-)
○中村, 勘三郎 (18世 1955-)
→: 中村, 勘九郎 (5世 1955-)

しかし、団体名標目では少々様子が異なります。「名称」が変わった時の扱いかたは一とおりでありません。たとえば、当館で逐次刊行物書誌データを作成する場合には、かつての団体名に加え、新しい団体名の著者標目を立てることにしておりますが、それらを「をも見よ」参照する場合と、「をも見よ」参照しない場合とがあるのです。

単純に名称を変更しただけで、組織の構成や法的性格などには何ら変化が生じない場合は、個人名の変更と同じように、変更前の団体名標目と変更後の団体名標目を、「をも見よ」参照するようにしています。

ところが、団体の名称が変わる際には、「法人格・組織上の位置づけの変更を伴う」、「団体の合併・分離を伴う」といった事例が少なくありません。特にこの数年は、平成の市町村大合併、大手出版社の分社化、大学の合併などが多く見受けられます。当館では、このような組織改編等に伴う名称変更の場合は、「をも見よ」参照していません。

一口に名称変更といっても、組織の看板である名称を変更するに至る理由は様々であり、「をも見よ」参照する単純な名称変更と、「をも見よ」参照しない組織改編等を伴う名称変更を判断するのは簡単ではありません。標目作成者は、名称変更による団体名標目の関係に気を遣います。

では、団体名の変更が、「単純な名称変更」なのか、それとも「組織改編等を伴う名称変更」なのかすなわち“団体名の変化の性質”を見分けるためにはどうしているのでしょうか。具体的な事例をもとに考えてみましょう。

たとえば、「相模工業大学」は、1990年に「湘南工科大学」に名称を変更しています。相模工業大学の名称のときに刊行されていた「相模工業大学紀要」は、「湘南工科大学紀要」に改められています。

刊行物に団体の沿革や組織図、名称変更の経緯が記載されていることもありますが、そのような情報がない場合や、記載された情報だけでは判断できないこともあります。そのようなときは、ホームページからも有益な情報を仕入れることができます。湘南工科大学のホームページを参照すると、「平成2年(1990) 法人名及び大学名を湘南工科大学に改称」とあり、特に他大学と合併したなどの事項が記載されていないことから、単純な名称変更と判断できます。

これに対し、「東京都立大学」が「首都大学東京」になった事例を考えてみましょう。首都大学東京は、東京都立大学、東京都立科学技術大学、東京都立短期大学、東京都立保健科学大学が合併して開学した大学です。そのため、単なる名称変更ではないと判断することになります。このように大学名の名称が変わった場合でも、団体名の変化の性質によって結論は異なります。

では、次の事例はどうでしょうか。「歌謡曲」という雑誌を出版している「ブックメイツ」は、2003年に「ゲッカヨ・エンタテイメント」に社名を変更しました。「ゲッカヨ」とは一風変わった社名ですが、これは「月刊歌謡曲」を省略したものと思われまます。

「歌謡曲」の319号巻末をみると、「今月から『ブックメイツ』ではなく『ゲッカヨ・エンタテイメント』がゲッカヨを作ることになりました。とは言えメンバーはいつもの仲間で、場所もスピリットも同じ。」という記述があります。とすれば、単なる名称変更と思われるかもしれません。

しかし、318号までの奥付には「編集・株式会社ブックメイツ」と記載されていたものが、319号奥付には「編集・有限会社ゲッカヨ・エンタテイメント」と表記されていることから、二つの会社の関係は、法人格が変わった際に名称を変更したものと判断できます。そのため、組織改編等に伴う名称変更と考え、「をも見よ」参照していません。なお、「歌謡曲」という雑誌は、417号(2010年1月号)から「Gekkayo: hit song magazine」というタイトルに改題されています。

当館では、先の話を含め、次のような事例があります。

○単なる名称変更と判断したもの

- 例1. 平凡出版株式会社→マガジンハウス (1983年に社名を変更)
- 例2. 相模工業大学→湘南工科大学 (1990年に大学名を変更)

○組織改編等を伴う名称変更と判断したもの

- ・組織の合併・分離・吸収があったうえで名称が変更する
- 例3. 東京都立大学、東京都立科学技術大学、東京都立短期大学、東京都立保健科学大

学→首都大学東京 (4つの大学・短期大学が合併して開学)

例4. 図書館情報大学→筑波大学図書館情報専門学群、筑波大学図書館情報学系、筑波大学大学院図書館情報メディア研究科 (一大学が他大学と合併して学部・研究科となる)

例5. 大宮市、浦和市、与野市→さいたま市 (複数の市町村合併による新しい市の発足)

・組織の中での階層が変更する

例6: 京都教育大学教育学部附属教育実践総合センター→京都教育大学附属教育実践総合センター (教育学部附属から大学附属へ変更)

・法人格が変更したうえで名称も変更する

例7. (株)ブックメイツ→(有)ゲッカヨ・エンタテイメント (株式会社から有限会社に変更した際に社名も変更)

・制度の変更を伴って名称が変更する

例8. 東京帝国大学→東京大学 (旧制大学から新制大学へ移行)

これらは調べやすかった事例であり、もっと手掛かりが少なく、刊行物中の文章内容、当該団体以外のインターネットサイト上情報などから推定しなければならないこともあり、見極めには悩まされることもあります。こういう場合、当該団体に問い合わせることで沿革や正式名称の情報を入手することもあります。

次に、「単なる名称変更」とした事例と、「組織改編等を伴う名称変更」とした事例において、NDL-OPACにおける書誌情報の表示形式の違いを見比べてみましょう。

○単なる名称変更と判断したもの(上記例1)

書誌情報 和雑誌新聞(1/2件目)		他のデータベースへ	手よむ!さがす!
請求記号	Z24-613		
タイトル	Popeye		
並列タイトル	ポパイ		
巻次・年月次	1巻1号 = 1 (Summer 1976)-		
出版地	東京		
出版者	マガジンハウス マガジンハウス		
出版年	1976-		
形態	; 26cm		
注記	1から160までの編者, 出版者: 平凡出版株式会社		
注記	1から358までの大きさ: 29cm		
注記	刊行頻度の変更あり		
注記	増刊とも		
刊行頻度	M: 月刊		
全国書誌番号	00029686		
旧和逐ID番号	29686		
団体・会議名標目	マガジンハウス マガジンハウス →: 平凡出版株式会社 ヘイボン シュツパン カブシキ ガイシャ		
団体・会議名標目	平凡出版株式会社 ヘイボン シュツパン カブシキ ガイシャ →: マガジンハウス マガジンハウス		
NDLC	ZWS		
本文の言語コード	jpn: 日本語		
書誌ID	000000029264		

この「Popeye」の出版者[1]は、平凡出版株式会社→マガジンハウスと変遷していますが、団体・会議名標目に「をも見よ」参照の表示(→:)があることで、この出版者が、会社の合併などを伴わない単なる名称変更であることがNDL-OPAC上の書誌情報から見て取れます。[2]

○組織改編等を伴う名称変更と判断したもの(上記例3)

書誌情報 和雑誌新聞(1/2件目) 他のデータベースへ もよみさがす! 全	
請求記号	Z18-1247
タイトル	小笠原研究
並列タイトル	Ogasawara research
巻次・年月次	1・2号(1978)～
出版地	八王子
出版者	首都大学東京小笠原研究委員会 シュト ダイガクトウキョウ オガサワラ ケンキュウ インカイ
出版年	1978-
形態	; 26cm
注記	出版者変遷: 東京都立大学小笠原研究委員会 (1/2号-no. 30)
ISSN	0386-8176
ISSN-L	0386-8176
全国書誌番号	00031604
旧和逐ID番号	31604
団体・会議名標目	首都大学東京 シュト ダイガクトウキョウ
団体・会議名標目	東京都立大学 トウキョウトリツ ダイガク
NDLC	ZR1
NDLC	ZM41
本文の言語コード	jpn: 日本語
書誌ID	000000031167

一方、「小笠原研究」という刊行物の書誌画面を見てみましょう。この資料は、東京都立大学と首都大学東京の下にある組織が発行しています。団体・会議名標目の欄を見ると、「をも見よ」参照の表示(→:)はありません。これによって、単純に、東京都立大学が首都大学東京に校名を変更したのではないということがわかります。

最後に、当館では、より正確な団体名標目の作成のために、不明な事項がある場合や問題点が生じた際には標目作成担当者間での連絡・相談を行っています。そして、団体名の変化一つに対応するために、刊行物や参考図書という紙の情報、インターネット上の情報、そして人的協力、それらを駆使しているのです。

(NDL 書誌情報ニュースレター標目探偵団)

[1] 当館が作成する逐次刊行物書誌データにおいては、編者の表記がない場合、必要に応じて出版者を著者標目にしていきます。

[2] 当館が作成する逐次刊行物書誌データにおいては、著者標目とする編者か出版者の名称が変わった場合、新旧両方の名称を著者標目としています。

掲載情報紹介

2010年7月1日～2010年10月29日に、国立国会図書館ホームページに掲載した書誌情報に関するコンテンツをご紹介します。

- ・ [「NDL 新着図書情報」を公開](#)

国立国会図書館に納入された国内刊行図書の基本書誌情報を掲載しています。

(掲載日：10月27日)

- ・ [「公共的書誌情報基盤に関する実務者会議」の概要を掲載](#)

8月9日に開催した「公共的書誌情報基盤に関する実務者会議」の出席機関および説明資料を掲載しています。

(掲載日：9月9日)

- ・ [国立国会図書館「日本目録規則1987年版改訂3版 第9章 電子資料」適用細則を更新](#)

国立国会図書館「日本目録規則1987年版改訂3版 第9章 電子資料」適用細則を更新しました。

(掲載日：9月2日)

- ・ [分類・件名 ウェブ版の国立国会図書館件名標目表 \(Web NDLSH\) を更新](#)

ウェブ版の国立国会図書館件名標目表 (Web NDLSH) を更新しました。

(掲載日：9月30日)

- ・ [分類・件名 国立国会図書館件名標目表 \(NDLSH\) 2008年度版追録\(2010年6月～2010年9月\)](#)

2010年6月～2010年9月に更新した件名標目のリストです。各月に新設した件名には以下のものがあります。

2010年6月：「箱根駅伝」「ビジネス支援サービス (図書館)」「プライベートブランド」

(掲載日：7月9日)

2010年7月：「光害」「食器洗い機」「熱硬化性樹脂」

(掲載日：8月9日)

2010年8月：「学習意欲」「小水力発電」「ニッチトップ」

(掲載日：9月9日)

2010年9月：「老舗」「ヒューマンエラー」「恋歌」

(掲載日：10月8日)

- ・ [雑誌記事索引採録誌一覧を更新](#)

当館が作成している雑誌記事索引に、現在記事を採録中もしくは過去に採録したことのある雑誌の一覧を更新しました。2010年9月29日現在の採録誌総数は、19,951誌で、そのうち、現在採録

中のものは10,426誌、廃刊・採録中止となったものは9,525誌です。

(掲載日：9月29日)

編集者からの一言

本年寅年の春、十二支の一巡りぶりに書誌部門に戻ってまいりました。この間のウェブの進展はめざましく、書誌サービスの世界もそれに応じた変化が求められていて、印刷カードを手で数えて配布し(半分嘘です)、分類・件名をデータシートに手で書いていた(これは本当です)者にとっては、今浦島の感があります。が、ここ十数年、主に利用者サービスに携わってきた目には、より利用を意識したものに変わろうとしている書誌サービスの変化は、好ましいものに映ります。

[2010年1号\(通号12号\)](#)等でもご紹介していますが、当館は平成24年1月に業務システムをリブレースし、新しく、MARC 21フォーマットでの書誌データの提供を開始します。それに向けて、私たちは現在、「データ移行の準備」、「書誌データ入力ルールの検討」、さらには「OPACのリニューアル」などに全力で取り組んでいます。

今号は、IFLA ヨーテボリ大会、TP&D フォーラム、ISO/TC46 会議済州島大会の国内外の会議への参加報告、7月27日に開催した公開講演会「セマンティック・ウェブと図書館：機械が情報を読む時代へ」の報告などをお届けします。セマンティック・ウェブについての講演会は、まさに書誌サービスの変貌を印象付けるものでした。講演会の資料と概要は、[当館ホームページ](#)に掲載しておりますので、どうぞ併せてお読みください。

(吾亦紅)

NDL 書誌情報ニュースレター(年4回刊)

2010年3号(通号14号) 2010年10月29日発行

ISSN 1882-0468/ISSN-L 1882-0468

編集・発行 国立国会図書館収集書誌部収集・書誌調整課

〒100-8924 東京都千代田区永田町 1-10-1

E-mail: bib-news@ndl.go.jp (ニュースレター編集担当)